

## 小中学生の男性モデルとしての父親

大 瀧 ミドリ\*・三 宅 貴 子\*\*

(平成元年10月31日受理)

### 要 旨

本研究の目的は、小中学生が父親を男性モデルとする場合、どのような要因が関与するかを明らかにすることにある。

小中学生 261 名（男子 130 名，女子 131 名）を男性モデルとして父親を肯定するもの（肯定群）と否定するもの（否定群）の 2 群に分類し，各群の対象者が父親に対して持つイメージ，父親との接触時間，接触行動（父親とともにする生活活動），父母の役割分化についてどのような差異があるかを検討する。結果は次の通りである。

1. 肯定群の比率には，有意な男女差は認められないが，小学生と中学生を比較した場合は，小学生の方が有意に高い比率を示し，明らかな学校段階差が認められる。
2. 父親イメージに関しては 6 つの因子が抽出される。第三因子以外は全て肯定的なイメージを示す因子である。肯定群は，否定群に比較して第三因子の得点は有意に低い，他の 5 因子の得点は全て有意に高い。
3. 父親との接触時間についてみると，平日・休日共に肯定群の方が有意に長い。
4. 父親と共に過ごす生活活動についてみると，朝食，夕食，会話，勉強を見てもらう等が肯定群の方に有意に多く見られる。
5. 家庭における父親と母親の役割分化について子どもの認知を見ると，肯定群では父親と母親の役割分化が不明確なものが有意に多い。

### KEY WORDS

elementary and junior high school students 小中学生 father 父親  
father-child relationship 父子関係 father's image 父親イメージ

### 1. は じ め に

子どもが育つ環境を家庭内に限定した場合でも，そこには父，母，きょうだいなど複数の人々が存在している。関係を現わす用語として親子関係が使われているが，その関係の内実は母子に集約して語られているのが現状である。母と子の関係だけが強調される傾向は，単に研究現場だけでなく日常生活においても認められる。例えば，子どもに関する問題が起きたとき，

---

\* 生活・健康系教育講座

\*\* 福井県美浜町立美浜北小学校

母親の生き方あるいは母性の欠如などを指摘する傾向が強いが、彼女のパートナーであり、子どもの父親である男性について同じように問われることはほとんどない。

このような背景の1つに、発達初期における母と子の関係を強調する発達理論の存在を指摘することができる。精神分析理論では、2・3歳頃までの重要な人物として母親だけを考えており、父親が登場するのは子どもがエディプス期に達してからである。また、学習理論では母と子の関係は一次的な欲求である飢餓の充足を介して二次的に形成されると考えられているため、乳房を持たぬ父親は報酬価を有しないため発達の初期における存在の必然性はないことになる。さらに、母子関係に関する理論として現在のところ最も多く受けいれられている愛着理論でも、母子関係の目標が子の生存にあるとされているため、母と子の関係をモノトロピイなものとして、母親以外の人との関係を考えていない。このように主要な母子関係理論では発達初期における父親の存在は子どもの発達にほとんど影響を与えないと仮定されているため、多くの実証的な研究は、父親を欠落したまま親子関係即母子関係と見なしている。また、その結果を育児情報として一般に提供することにより、子育て環境から父親を閉め出すことに手を貸している実状がある。

さらに、男女の生き方に関する社会規範も母子関係を強調する手立ての1つになっている。例えば、社会的に男性の存在そのものが父親役割に還元されることはないが、女性の場合はその存在意義が母親役割に還元され、母親になるものとして教育され、女性自身もそのような人生をよしとするものが多い。そのため男性は後顧の憂いを女性に託し、社会的経済的職務にエネルギーを注ぐことができるわけであり、性役割分担は利潤追求を第一とする産業社会にはまさに都合のよいものとなっている。それ故、経済的側面からもこの性役割分担が強化されることとなり、世界的規模で高度産業化社会に父親不在の時代を生み出している。

父親の存在を無視したり、不在を促進するような子育ての現状のもとにあって、親子関係の研究において父親の役割を問う傾向が明確になってきたのは比較的最近のことである。例えばアメリカ心理学会では1960年に「家庭における父親の役割と影響」についてのシンポジウムが行われている。日本では1980年の日本教育心理学会の自主シンポジウムで最初にとりあげられており、日本における父子関係の研究はまだその緒についたに過ぎない。しかし、近年、多くの母子関係の研究者が母子関係だけでなく父子関係にも関心を向けるようになり、研究も活発になってきている<sup>1)</sup>。

その他、登校拒否等に社会的関心が高まる中で家庭における父親の存在の不鮮明さの問題が指摘<sup>2)</sup>されたり、あるいは回顧的意味を含めて父親の権威へのノスタルジアからいわゆるおやじ論といわれる書物<sup>3)</sup>が多く目を引くようになってきている。ラム<sup>4)</sup>は父子関係の研究を概観して、父親の心の温かさ、愛情深さ、子どもの心の支えとなることなどが父子関係の質的な面に大きく関わる変数であることを指摘している。これらは、パーソンズの理論<sup>5)</sup>からするとむしろ母親の役割とされるものであり、両者の父親の役割のとらえ方にはずれがある。これは、前者が関係の心理的側面を重視し、後者が機能的側面を重視することによるものといえよう。ところで、具体的な父と子の関わりにおける情緒的なレベルでのポジティブな体験は、モデルの取り込みに大きく関与することは社会的学習理論からも明かにされている。しかしながら、父親の在り方を問うことなしに、子どもの性別役割形成のモデルとして父親の存在を強調することは、旧来の性別役割を拡大再生産することになりかねない危険性がある。それ故、父子関係を問題とする場合は、父親の生き方についても詳細に検討する必要がある。

本研究では、男性モデルとして父親を肯定している子どもたちと否定している子どもたちを比較対照することにより、男性モデルとしての父親の在り方について検討しようとするものである。

## 2. 方 法

調査対象： 福井県三方郡美浜町の小中学生 261 名（小学生 139 名，中学生 122 名）であり，その内訳は次の通りである。

小学 3 年 22 名（男子 11 名，女子 11 名），小学 4 年 21 名（男子 11 名，女子 10 名）  
小学 5 年 44 名（男子 21 名，女子 23 名），小学 6 年 52 名（男子 27 名，女子 25 名）  
中学 1 年 38 名（男子 17 名，女子 21 名），中学 2 年 40 名（男子 19 名，女子 21 名）  
中学 3 年 44 名（男子 24 名，女子 20 名）

なお，調査は授業時に行ったため回収率は 100% である。

本地域は若狭湾の海岸線に面した人口約 13000 人の小都市であり，観光地として他地域からの人々の往来がかなり頻繁な地域であり，地域的には比較的開放的な特性を有している。

調査方法：調査内容は，つぎの 5 領域から構成されている。

1. 父親を男性モデルとする肯定度
2. 父親イメージ
3. 父親との接触時間
4. 父親と過ごす生活活動
5. 父親と母親の役割分化の認知

調査時期：1988 年 3 月

結果の分析：まず，調査内容に関する一般的傾向について検討するとともに総務庁の調査と類似の調査内容のものについては両者を比較し，調査地域の独自性について検討する。ついで，父親を男性モデルとする度合いとの関連について検討する。

## 3. 結 果 と 考 察

### 1. 男性モデルとしての父親の肯定度

表 1 は，父親を男性モデルとして肯定する比率について見たものである。父親を男性モデルとして全面的に肯定するものは小学 3 年に最も多く，約 6 割を占めている。しかし，他の学年ではこの比率は 1～3 割程と低く，特に小学 6 年と中学 1 年で低くなっている。「全く肯定」「肯定」を合わせた比率を見ると，小学 3 年から順次，59.1%，76.2%，59.1%，42.0%，36.8%，40.0%，43.2% となり，小学 4 年が最も高く，いずれの学年とも有意差がある。また，小学 5 年も小学 3 年以外の学年と有意差があることから考えると，小学 3・4・5 年と 6 年・中学 1・2・3 年の間に父親を男性モデルとする取り込みの転換期があることが想定される。この傾向は，同種の総務庁の調査（父親が好きかどうか）<sup>6)</sup>からもうかがえる。但し，小学生と中学生の結果が一括処理されているため，本結果に見出だされたような小学 5 年と 6 年の間に父—子関係の情緒的な面における転換期が存在するか否かは明らかでない。また，磯貝ら<sup>7)</sup>が小学 4 年から中学 3

年までを対象としたライフ・スタイルの研究では、小学4・5年は大人の「よい子」の規範に当てはまるが、中学2・3年では大人の規範から明確に逸脱しており、小学6と中学1年は両者の中間に位置することを見いだしている。このことは小学5年と6年との間で行動規範の取り込みが、親を含むおとなの価値観から仲間の価値観へと変化することを意味しており、本結果で見いだされた父親を男性モデルとする度合いの学年差と同じような発達の傾向を示唆している。

なお、父親を男性モデルとする肯定度を見るために、男子には「将来、父親のようにになりたいか」を問い、女子には「将来、父親のような人と結婚したいか」を問うており、同じ男性モデルを問うといいながらも問の意味が男女により異なるため、肯定度に与える間の影響を懸念していたが、いずれの学年においても有意な男女差は認められないことから問による影響はないものと考えられる。

また、父親を男性モデルとする肯定度と他の要因との関連を見るにあたっては、「全く肯定」「肯定」とするものを肯定群とし、「否定」「全く否定」とするものを否定群として両群の差異について比較検討する。

表1 父親を男性モデルとする比率(%)

学 年	全く肯定	肯定	否定	全く否定
小 3	59.1	0.0	31.8	9.1
学 4	28.6	47.6	14.3	9.5
校 5	13.6	45.5	34.1	6.8
6	8.0	34.0	40.0	18.0
中 1	7.9	28.9	44.7	18.4
学 2	10.0	30.0	47.5	12.5
校 3	22.7	20.5	43.2	13.6
男 子	16.4	27.6	41.8	14.2
女 子	19.2	33.6	35.2	12.0

## 2. 父親イメージ

### 1) 因子分析の結果と各因子得点

父親の行動特性を示す語を提示し、自分の父親に適當すると思う語を幾つでも選択するように指示する。その結果、選択率が10%以下であった語を除いた41語について因子分析を行った結果、表2に示した6因子が抽出される。

第一因子には12種の特性語が含まれ、特に、「穏やか」「理解」「思いやり」「細やか」「親しみ」「家庭的」「おおらか」「やさしい」など人に対するポジティブな情緒的関係を示す語が多く含まれている。このことから優しさの因子と名づける。第二因子には8種の特性語が含まれ、「男らしい」「頼りになる」「たくましい」「強い」などいわゆる男らしさを示す特性語が多く含まれていることからこの因子を男性的因子と名づける。第三因子には「怒りっぽい」「短気」「うるさい」など、いずれも人に対するネガティブな情緒的関係を成立させるものが含まれている。これらは、自分の感情や価値観を一方的に相手に押し付けたり、相手からの信号を正しく感じ取る能力を欠いているために自分の感情で相手に対処しようとする時などに、相手から受ける評価でもあるためこの因子を身勝手の因子と名づける。第四因子には、6種の特性語が含まれ、「ユーモア」「明るい」「悪戯好き」「話しやすい」「朗らか」など人間的な明るさや余裕を示す特性語が多く含まれているので、この因子を朗らかさの因子と名づける。第五因子は3種の特性語からなり、行動的因子と名づける。最後の第六因子も3種の特性語からなり、共通性を見いだすことが難しいがここでは仕事中心の因子と名づける。

各因子の平均点を見ると第一因子から順次、0.27, 0.26, 0.21, 0.27, 0.17, 0.28であり、第一、二、四、六因子の間には有意差は認められず、また第三と五因子間にも有意差は認められない。

しかし、前4因子と後2因子間には顕著な有意差が認められる。このことから父親イメージを要約すると、優しく、男らしく、朗らかで仕事中心に考える傾向は強いものの、あまり身勝手でも行動的でもないというのが現代の子どもからみた父親像になる。伝統的な日本の父親は、独裁的で、超然とし、時に家族を怒鳴りつけることから地震・雷などのような災害と同列に扱われていたが、現代の父親イメージはこれらとは様変わりしている。総務庁の調査でも現代の父親は一世代前の父親よりも自分の方を優しく思いやりがあると評価しているが、この父親の

表2 父親イメージに関する因子と因子負荷量

特 性	第一因子	第二因子	第三因子	第四因子	第五因子	第六因子
穏やか	0.619	0.046	-0.020	0.165	0.033	0.134
子に理解がある	0.547	0.105	-0.059	0.202	0.068	0.187
冷静	0.527	0.144	0.010	0.074	-0.067	0.164
思いやりがある	0.515	0.263	0.028	0.212	0.014	0.176
真面目	0.508	0.197	0.148	-0.109	-0.031	0.055
意見が合う	0.499	0.228	-0.052	0.153	0.188	-0.094
親しみやすい	0.483	0.164	-0.073	0.353	0.136	-0.006
気持ちが細やか	0.465	0.089	0.087	-0.040	0.165	-0.032
家庭的	0.422	0.351	-0.040	0.072	0.078	0.032
おおらか	0.417	0.138	-0.054	0.302	0.042	0.149
優しい	0.408	0.287	-0.090	0.363	-0.072	0.008
根気がある	0.407	0.075	0.080	0.089	0.291	0.114
男らしい	-0.014	0.708	0.038	0.116	0.079	0.197
尊敬	0.105	0.573	-0.050	0.173	0.175	0.047
かっこ良い	0.140	0.532	0.014	-0.023	-0.098	0.117
頼りになる	0.232	0.530	0.016	0.165	0.040	0.064
素晴らしい	0.366	0.520	-0.087	0.095	-0.019	0.235
たくましい	0.212	0.477	0.103	0.135	0.270	0.078
温かい	0.378	0.469	-0.065	0.160	0.122	-0.042
強い	0.198	0.436	0.159	0.208	0.367	0.149
おこりっぽい	-0.133	0.046	0.704	-0.008	0.152	0.055
短気	-0.061	-0.102	0.545	0.226	0.203	-0.052
うるさい	-0.163	-0.003	0.534	-0.015	-0.025	0.020
よく叱る	0.097	0.021	0.519	-0.063	-0.139	0.027
こわい	-0.030	0.057	0.517	0.102	0.105	-0.008
自分勝手	-0.017	-0.009	0.510	0.180	0.146	-0.093
意見が合わない	-0.047	-0.064	0.462	0.112	-0.138	0.173
激しい	0.015	0.132	0.407	0.035	0.059	-0.049
厳しい	0.087	0.152	0.400	-0.010	0.058	0.115
ユーモアがある	0.237	0.233	0.004	0.521	0.033	-0.049
明るい	0.200	0.399	-0.010	0.515	-0.050	0.145
いたずら好き	-0.073	0.087	0.088	0.514	0.009	0.097
話しやすい	0.324	0.361	-0.075	0.449	0.178	0.073
朗らか	0.304	0.221	-0.072	0.445	0.239	0.111
あてにならない	0.016	0.016	0.192	0.426	0.072	-0.087
行動派	0.182	0.144	0.036	0.199	0.477	0.279
進歩的	0.278	0.183	0.227	0.048	0.414	0.134
意欲的	0.341	0.068	0.167	0.056	0.409	-0.043
心が広い	0.262	0.388	-0.016	0.180	0.111	0.499
よく気がつく	0.176	0.300	-0.004	0.206	0.067	0.450
仕事中心	0.222	0.215	0.139	-0.132	0.102	0.422

世代間変化は本結果と一致し、現代の父親イメージの変化は父親自身の変化に起因することが推察される。

次に各因子の学年差を見る。小学中学年（3・4年）、小学高学年（5・6年）、中学（1～3年）の3群について検討する。有意な学年差は第五因子のみで、小学中学年（0.09）は、小学高学年（0.14）や中学（0.21）に比較して父親をより行動的・意欲的なイメージでとらえている。しかし、学年差による父親イメージの違いはほとんどないものと考えられる。

また、男女差については、第一因子および第四因子に有意な男女差が見られ、いずれの因子得点も女子（0.30, 0.33）の方が男子（0.24, 0.21）より有意に高く、女子には優しく、朗らかな父親イメージを持つものが多く、父親との関係をやすらぎのある関係ととらえている。

## 2) 肯定度と各因子

父親を男性モデルとする肯定群と否定群の各因子の平均得点を示したのが表3である。

肯定群の平均は、否定群に比較して第一、二、四、六因子において有意に高い得点を示し、第三因子は有意に低い得点を示し、第五因子には有意差が認められない。第三因子は、先述したように父親が自分の感情をストレートに子どもに表出するものであり、対人関係においてネガティブな関係を生じさせるものである。

表3 肯定群と否定群の各因子の平均点 平均(標準偏差)

因 子	肯定群(N=126)	否定群(N=134)	t 得点	p
第一因子	0.34(0.262)	0.21(0.228)	4.33	0.000
第二因子	0.35(0.293)	0.18(0.235)	5.00	0.000
第三因子	0.17(0.205)	0.25(0.250)	3.06	0.002
第四因子	0.34(0.283)	0.22(0.255)	3.55	0.000
第五因子	0.20(0.290)	0.14(0.253)	1.68	0.095
第六因子	0.34(0.350)	0.22(0.300)	2.84	0.005

この因子が肯定群に低く、否定群に高いということは父親を男性モデルとして取り込もうとするか否かにこの因子が大きく関与していることを示唆している。父親に対して肯定的な感情を持つことが、父親をモデルとして取り込みやすいということは、バーンデューラーとオウルターズ<sup>9)</sup>の結果とも一致するものであり、父親を男性モデルとして取り込むことには、父と子の関係が良好なものとして子どもに認知されていることが重要であることを示している。本結果は、同一視あるいは社会的学習理論におけるモデルの取り込みにモデルの対象となるものとプラスの関係をもつことの効果を指摘する結果を支持するものとなっている。肯定群の父親イメージは、否定群のものに比較してやさしく、男らしく、朗らかで仕事中心に考える傾向は強いものの、あまり身勝手ではないということになる。一方、否定群の父親イメージは肯定群に比較して大変身勝手で、あまりやさしくも男らしくも朗らかでも仕事中心でもないということになり、父親を男性モデルとして取り込むか否かと父親イメージの肯定度とは一致している。パーソンズの理論<sup>9)</sup>では、肯定群の父親イメージは父親の役割と言うよりも母親の役割とされる表出的役割に相当する。パーソンズは、父親の役割と母親の役割が明確に分化していることが家庭の集団としての纏まりや機能を発揮するために必要な要件であるとしており本結果とは大きく異なっている。しかし、ラム<sup>10)</sup>やシアーズ<sup>11)</sup>やマッセン<sup>12)</sup>は、父親の優しさや心の温かさが子どものパーソナリティの形成にプラスの関連があるという結果を提示しており、これらの結果は本結果を支持している。それ故、パーソンズの理論では、父親の道具的役割を強調する余り表出的役割を軽視し過ぎたとするラムの指摘は妥当と考えられる。

肯定度と学年との間に有意差が見られた因子は、肯定群では第五因子のみであり( $t=2.41$   $p<0.02$ )、小学中学年（0.10）に比較して中学（0.26）の方が父親に対して行動的・意欲的なイメー

ジを持つものが多い。しかし、否定群においてはいずれの因子においても学年間には有意差は認められない。このことから父親イメージに関して学年と肯定度の間には余り積極的な関連は認められないものと考えられる。

各因子における肯定度と男女差について見たのが表4である。

肯定群と否定群では肯定群の方に多くの有意な男女差が見いだされている。肯定群において有意な男女差が見られたのは第一、二、四因子であり、否定群に有意な男女差が見られたのは第一、四因子であり、肯定群の方に多くの男女差が見いだされる。肯定群の女子は男子よりも父親に対して優しく、男らしく、朗らかなイメージを持っており、否定群の女子は男子よりも父親に対して優しく、朗らかなイメージを持っている。優しさと朗らかというイメージは両群

表4 肯定群と否定群の各因子における性差 平均(標準偏差)

	因子	男子	女子	t得点	p
肯定群 男子(N=73) 女子(N=53)	第一因子	0.30(0.265)	0.40(0.248)	2.12	0.036
	第二因子	0.29(0.278)	0.42(0.298)	2.65	0.009
	第三因子	0.15(0.196)	0.19(0.215)	0.93	
	第四因子	0.26(0.253)	0.43(0.295)	3.46	0.001
	第五因子	0.19(0.288)	0.20(0.295)	0.18	
	第六因子	0.30(0.336)	0.40(0.364)	1.58	
否定群 男子(N=57) 女子(N=77)	第一因子	0.16(0.204)	0.24(0.240)	2.06	0.037
	第二因子	0.17(0.220)	0.19(0.246)	0.42	
	第三因子	0.28(0.264)	0.23(0.239)	1.23	
	第四因子	0.15(0.197)	0.27(0.280)	2.87	0.005
	第五因子	0.11(0.210)	0.16(0.279)	1.34	
	第六因子	0.22(0.299)	0.23(0.302)	0.25	

の女子に共通に認められるイメージである。勿論、表中に見られるように肯定群の女子の方が否定群の女子よりも父親に対してプラスのイメージを持っている。ラム<sup>13)</sup>は、愛情細やかな世話や心遣いをする父親は、女子の心理面的適応にプラスに働き、異性との肯定的な関係にプラスの効果を持つことを見だしており、この結果から解釈すると肯定群の女子の方が異性と適応的關係を形成される可能性が示唆される。

### 3. 父親の接触時間との関連

父一子関係の成立は、双方の物理的な接触なしには有り得ない。平日と休日における父親と子どもの接触時間について見たものが表5である。

平日に父親との接触時間が全く無いものがどの学年にも見られる。一方、接触時間が7時間というものもあり、接触時間の分布が非常に大きいことを示している。この傾向は、休日にさらに顕著となり、接触時間の最小値は0時間であるのに対して最大値は16.5時間となっている。なお、平日と休日に最大値を示したものは同一対象である。父親との接触時間が0のものは平日では15.9%、休日では20.1%とかなり高い比率を示し

表5 学年別における父親との接触時間(分)

学年	平 日				休 日			
	M	SD	最大値	最小値	M	SD	最大値	最小値
小 3	52.9	70.81	300.0	0.0	249.7	349.56	900.0	0.0
学 4	108.8	110.93	300.0	0.0	310.0	328.54	900.0	0.0
校 5	107.9	105.82	360.0	0.0	359.3	258.32	900.0	0.0
6	122.5	108.95	420.0	0.0	255.2	208.43	990.0	0.0
中 1	53.2	50.36	180.0	0.0	134.1	150.85	660.0	0.0
学 2	52.9	59.23	180.0	0.0	121.2	102.94	300.0	0.0
校 3	41.8	48.86	200.0	0.0	109.0	134.33	600.0	0.0

ている。平均接触時間は、平日は1時間18分、休日は2時間33分であり、平日と休日の接触時間には、有意な相関( $r=0.64$ ,  $p<0.001$ )が見られる。総務庁の結果<sup>14)</sup>と比較すると本対象が父親と過ごす時間は平日、休日ともに2倍程長くなっている。また、父親の家庭の平均滞在時間は、約12.7時間であり、父親の家庭の滞在時間と接触時間には、有意な相関関係( $r=0.314$ ,  $p<0.001$ )が認められ、滞在時間の長い父親は子どもとの接触時間も長くなっている。大都市の父親が家庭に滞在する時間は約8時間といわれているが、本結果の父親の家庭滞在時間の長さは、地方都市であるために職場と家庭とが比較的接近していると言う職住に関する物理的条件によるものと考えられる。

学年差について見ると、平日では小学3年(52.9分)・中学1年(53.2分)・中学2年(52.9分)・中学3年(41.8分)の間には有意差はなく、小学4年(108.8分)・小学5年(107.9分)・小学6年(122.5分)の間にも有意差はない。しかし前者と後者の間にはいずれの学年間にも有意差があり、後者の方が父親との接触時間が有意に長くなっている。また、休日では小学生(294.2分)と中学生(120.2分)の間に有意差がある。つまり、平日・休日共に父親との接触時間は小学生の方が中学生よりも顕著に長い( $t=6.16$ ,  $p<0.001$ )。この傾向は男女に共通しており、有意な男女差は認められない。

肯定度との関係について見ると、肯定群の方が平日(93.2分)・休日(262.0分)ともに否定群(63.2分, 164.0分)より有意に長い時間を父親と共に過ごしている。また、肯定群の父親の家庭滞在時間と接触時間には有意な相関関係( $r=0.388$ ,  $p<0.001$ )が認められるが、否定群には見られないことから接触時間に群効果が見られる。しかし、肯定群の父親の家庭滞在時間は12.9時間であり、否定群は12.6時間であり、両群の父親の滞在時間には有意差はない。このことは単に物理的な家庭の滞在時間の長短が、父と子の接触時間を規定するものではないことを示唆している。

#### 4. 父親と共に行う生活活動

食事や会話などの日常生活活動とスポーツや趣味などの非日常的生活活動を週当たり父と子がどの程度、共有するかを見たのが表6である。食事や会話というような極めて日常的な活動であっても父親と時間を共有するものは非常に少なく、非日常的な活動においてはさらにその頻度は少なくなり、7割近くのもの週単位で非日常的生活活動を共有する機会が無いとしている。有意な学年差が見出された活動は、会話、家事、勉強である。

父親と会話する機会は、小学中学年(53.5%)は小学高学年(79.5%)や中学(77.7%)よりも少ないが、勉強を見てもらう機会(23.3%)は小学高学年(15.0%)や中学(6.7%)よりも多い。また、父親と一緒に家事をする機会は、小学高学年(19.3%)が小学中学年(7.0%)や中学(6.6%)よりも多い。父親と生活活動を共有する機会は、子どもの年齢的な発達と関連を持ち、年齢の上昇により相対的に減少する傾向が認められる。なお、総務庁の結果<sup>15)</sup>と比較したところ、この地域の特徴は父と子が共に家事参加する週当たりの機会が有意に高い( $\chi^2=6.67$   $p<0.001$ )ことである。しかし、これは表6に示されているように比率そのものが高いいわけではない。いず

表6 父親と一緒にいる生活活動と頻度 (%)

生活活動	毎日	4・5回	3回	1・2回	無い
朝 食	30.5	13.7	10.9	17.6	27.3
夕 食	44.1	21.1	11.3	14.5	9.0
会 話	47.9	17.5	8.9	12.8	12.8
家 事	2.3	2.3	6.6	22.2	66.5
勉 強	2.3	3.1	7.0	19.9	67.6
趣 味	2.7	2.7	7.8	15.6	71.1
ス ポ ー ツ	1.2	1.2	8.9	13.3	79.2



れの活動においても有意な男女差は認められない。

## 2) 肯定度と生活活動

子どもが父親と過ごす生活活動の週当りの機会と肯定度の関係を見たのが表7である。

肯定度の違いにより有意差が認められた活動は、やはり極めて日常的な朝食、会話、勉強の3種類であり、いずれも肯定群の方が否定群よりも父親と活動を共有する機会が多く、群効果が認められる。肯定群が時間的にも場的にも父親と多く関わる機会を持つことと父親に対して肯定的なイメージを形成することの間に顕著な関連がある。

人間関係そのものの形成過程において生活を共有することの意味は非常に大きい。例えば、はした<sup>16)</sup>も妻の入院により主夫として生活レベルで子どもと関わる中で親として育つ姿を体験的に描いているが、ここでは単に父親が変わっただけでなく、その関係の一方の担い手である子どもも確実に成長している。父子関係の形成には、やはり生活的レベルで関わることの有意性が指摘される。

また、肯定群の学年差を見ると、有意差が認められたものは会話のみであり ( $\chi^2=9.97$ ,  $p<0.05$ )、週に4回以上父親と会話するものの比率は小学高学年 (83.0%) > 中学 (70.8%) > 小学中学年 (55.2%) となっている。また、5%水準では有意差が認められないが、父親と共に家事に参加する回数が週4回以上の比率には、小学高学年 (8.5%) > 小学中学年 (6.9%) > 中学 (0.0%) の傾向が見られる ( $\chi^2=9.31$ ,  $p=0.064$ )。趣味には、小学中学年 (13.8%) > 小学高学年 (4.3%) > 中学 (2.1%) の傾向が見られる ( $\chi^2=8.11$ ,  $p=0.088$ )。肯定群においても子どもの年齢的発達により父親との接触の機会と場が減少して行く傾向が認められる。否定群では、会話と勉強に有意差が認められる ( $\chi^2=12.70$ ,  $p<0.02$ ,  $\chi^2=10.64$ ,  $p<0.01$ )。会話は週4回以上父親と会話する比率が小学中学年 (21.4%) が最も低く、小学高学年 (60.0%) と中学 (65.8%) はほぼ同率となっている。逆に、勉強

表7 生活活動と肯定度 (%)

生活活動		4回以上	3回	2回以下	$\chi^2$	p
朝 食	肯定	55.3	8.9	35.8	12.47	0.002
	否定	33.3	12.9	53.8		
夕 食	肯定	70.7	10.6	18.7	3.65	
	否定	59.8	12.1	28.0		
会 話	肯定	71.8	10.5	17.7	8.21	0.016
	否定	59.1	7.6	33.3		
家 事	肯定	4.8	8.1	87.1	0.81	
	否定	4.5	5.3	90.2		
勉 強	肯定	9.8	8.1	82.1	6.75	0.034
	否定	1.5	6.1	92.4		
趣 味	肯定	5.7	10.6	83.7	2.50	
	否定	5.3	5.3	89.4		
スポーツ	肯定	2.4	5.7	91.9	0.17	
	否定	2.3	4.6	93.1		

は週4回以上の比率は小学中学年 (7.1%) が高く、小学高学年 (0.0%) と中学 (1.4%) は低い。否定群では子どもと活動を共有する場と機会そのものが少ないということもあって子どもの年齢的発達との関係には必ずしも一義的關係は見られない。肯定群について男女差が見られたのは会話と家事であり ( $\chi^2=6.20$ ,  $p<0.01$ ,  $\chi^2=6.20$ ,  $p<0.01$ )、いずれも男子 (65.3%, 1.4%) より女子 (80.8%, 9.6%) の方が有意に高くなっている。否定群では有意な男女差は認められない。

## 5. 家庭における父親と母親に対する役割分化の認知

家庭における父親と母親の役割分化について子どもの認知を見たものが表8である。

父親と母親の比率を比較した場合には、父親の方が家族の中心に位置し、母よりもこわいが

尊敬できると認知しているものが多い。また、母親については父親よりも厳しく、口うるさいけれども理解してくれるし、一緒に過ごすことが多いと認知し、家庭における父親と母親を明確に分化してとらえている。父親を家庭の中心と見ているものの内、約6割は父親をこわいとしており、父を尊敬できるとするものは約3割と少ない。このことから考えると父親が家庭の中心の座を得ているのは、父親の人間的なものによってよりも、むしろこわさによるものと思われる。これは、先に父親イメージのところでは新しいタイプの父親像が描き出されたが、家族の座という視点から見た場合には、かつて父親の座が、父親自身の権威の結果として与えられたというよりも、家父長制という制度的なものの後押しによって権威を与えられていたに過ぎない父親が多かったが、現代の父親も同じように父親自身の独自の人間的なポジティブな存在が認められることによって、家族の中心的座を与えられているのではなさそうである。

父親と母親の役割分化については有意な学年差は見られないが、男子と女子では役割認知に有意な違いがあり、男子の方は母親よりも父親を頼りになり(37.1%)、こわい(57.8%)けど尊敬できる(31.3%)とするものが女子(24.1%, 42.2%, 19.6%)よりも多く( $\chi^2=6.52$ ,  $p<0.05$ ,  $\chi^2=7.87$ ,  $p<0.05$ ,  $\chi^2=8.51$ ,  $p<0.02$ )、女子の方は父親よりも母親の方が厳しく(52.6%)、こわい(33.3%)とするものが男子(38.4%, 17.4%)よりも多くなっている( $\chi^2=5.35$ ,  $p<0.069$ ,  $\chi^2=7.87$ ,  $p<0.02$ )。このように男子と女子では家庭内の父親と母親のとらえ方に明確な差異が認められる。この点については後で改めて検討する。

肯定度と家庭での父親と母親の役割分化について子どもの認知を見たのが表9である。

肯定度による有意差は表中に見られるように、厳しいとこわい以外のすべてに認められる。まず、肯定度による違いを父親について見ると、肯定群では理解してくれるとする比率が高く、否定群では口うるさいとするものが高い。また、母親について見ると理解してくれるが高く、否定群では頼りになる、一緒に過ごす、尊敬するが高い。さらに、両親とする比率につい

表8 父親と母親の家庭内の役割 (%)

役 割	父親	母親	両親
家族の中心	55.4	10.4	34.1
厳しい	28.5	45.2	26.4
頼りになる	30.6	22.0	47.4
理解してくれる	13.1	38.0	48.9
一緒に過ごす	9.3	57.3	33.5
口うるさい	21.6	59.4	19.4
こわい	50.2	25.1	24.6
尊敬する	25.1	11.6	62.9

表9 肯定度と父親と母親の家庭内の役割 (%)

役 割	群	父親	母親	両親	$\chi^2$	p
家族の中心	肯定	52.1	6.7	41.2	6.14	0.046
	否定	58.6	13.3	28.1		
厳しい	肯定	24.1	46.4	29.5	2.47	
	否定	32.5	44.4	23.0		
頼りになる	肯定	30.2	12.1	57.8	14.93	0.001
	否定	31.3	31.3	37.4		
理解してくれる	肯定	13.4	25.9	60.7	13.68	0.001
	否定	2.3	4.6	93.1		
一緒に過ごす	肯定	7.4	49.1	43.5	9.76	0.008
	否定	11.1	65.0	23.9		
口うるさい	肯定	13.9	62.4	23.8	7.81	0.020
	否定	28.3	56.7	15.0		
こわい	肯定	48.5	21.6	29.9	2.93	
	否定	51.3	28.3	20.4		
尊敬する	肯定	26.1	4.3	69.6	11.51	0.003
	否定	25.0	18.5	56.5		

てみると、家族の中心、頼りになる、一緒に過ごすことが多い、尊敬するのは肯定群の方が高く、理解してくれるのは否定群の方が高くなっている。肯定群で父母が共に家族の中心の座を占めているとしたものについて上記3項目についても父母共にとしたものの比率を見ると、父母を共に頼りになるとしたものの約77%、一緒に過ごすことが多いとしたものの約42%、尊敬するとしたものの約76%であり、父母が共に家族の中心的座を占めている家庭では人間的にポジティブな関係の中で父と母が共にその座を得ていることを示している。先に、父親のみを家族の中心とするものについて見た結果とは異なっている。このように肯定群の方に父母共にとする比率が否定群よりも高く、肯定群の家庭では父母の集団的（地位）・心理的・物理的役割分化はあまり明確でないことを示しており、父親と母親の役割が明確に分化している方が家族の集団的・機能的意義が大きいとするパーソンズの指摘とは矛盾する結果となっている。

学年差及び肯定群における男女差は有意でない。しかし、否定群では父親について厳しさについては男子（40.4%）>女子（26.1%）、こわさについては男子（57.8%）>女子（42.2%）、尊敬するについては男子（31.3%）>女子（19.6%）であり、逆に母については厳しいは女子（55.1%）>男子（31.6%）、こわいのは女子（33.3%）>男子（17.4%）、尊敬するは女子（17.0%）>男子（6.3%）となっている。これらは、先に全体的に見た男女差の結果と一致するものである。否定群では、子どもの性により父親と母親の家庭内での受けとめ方に違いがあることを示している。このような差異が、どのような父子関係又は母子関係から派生するものかについてはさらに検討する必要がある。

#### 4. お わ り に

パーソンズの理論では、父親には道具的役割が課されており、家族を維持していくための生活費を得ることと家庭を代表して対社会的な問題にあたる役割を負っている。これに対して母親は、家族員の欲求不満を解消し、敵意や攻撃行動を緩和し、成員の融和を図るなど家族集団をまとめていく役割を負っており、これは表出的役割と言われる。家族集団の中で父親と母親の役割が明確に分化していることが、家族の集団としての纏まりをよくし、集団も有効に機能するとしている。つまり、父親と母親の役割の分化が明確であるのが好い家庭とされている。しかしながら、本結果では父親を男性モデルと肯定するものは父親に対して、パーソンズのいう母親的役割である表出的役割に相応するイメージを持っている。さらに、父親と母親に対して明確な役割分化を持つものよりも、むしろ父親と母親が同じような役割を持っていると認知しているものの方が、より人間的にポジティブな関係を父親と持っていることが明らかとなる。つまり、父親がパーソンズの理論に反する役割をとる家庭の方が、子どもの発達にプラスとなっていることを示している。この結果は、ラム<sup>7)</sup>の指摘とも一致するものである。彼は、父親の心の温かさは男子の自尊感情や人格適応と関連があり、また愛情細やかな会話や心遣いをする父親をもつ女子は心理的適応が良好で、異性との関係もうまくやっていけるという。さらに、父親の影響は漫画風に描かれる男らしさの典型に父親が似ているかどうかということとはあまり関係なく、むしろ女性の仕事と一般に考えられていることに父親がどの程度関わるかの方が大きな影響力をもつとしている。本結果でも、父親を男性モデルとして取り込むか否かによって父親イメージが明確な違いを呈しており、父親に対して肯定的イメージを持つものの多くは

父親を男性モデルとして受け入れている。このようなパーソンズの役割理論と本結果のずれは、1つにはこの理論が提示された時代の性役割分化の状況の違いが考えられる。つまり、当時のアメリカ社会ではまさに「男は外、女は内」という性役割分業が非常に明確であり、本結果やラムに見出された優しさあるいは心の温かさというような、いわゆる父親のもつ表出的要素の重要性が過少評価されていた可能性が考えられる。そして、このことが結果としてラムの指摘するように父親の道具的役割を強調することになったものと推察される。性役割はもともと生物学的性に付随したものではなく、社会的に付与されたものであるという立場に立てば、性役割は時代の流れの中で変容してゆく必然性を持ったものというところえかたが必要となる。その意味では、パーソンズ理論のように時代を越えて父親の役割を固定的にとらえようとするには無理があると言えよう。しかし、現実には固定的な性役割が社会的に浸透しており、その具体的例を父子家庭になった男性が父親としての役割を担おうとしたときに顕著にみることができる。彼が単親の父親であり続けようとするための援助を求めに行く行政の窓口では、父親であり続けるための具体的な方法や経済的援助が与えられることは少なく、むしろ、再婚や子どもを施設に入れることが勧められ、まるで女性なしでは男性が親になれないかのような状況に出会う<sup>19)</sup>とのことである。これは、まさに、父親が道具的役割と表出的役割を合せ持つ存在として社会的に見なされていないことを如実に示すものである。このような父親役割についての思い込みは、男性自身の中にも多分にあるように思われる。例えば男性が、仕事・家庭・子どもを持つことについて女性ほど思い悩むということはあまり耳にしない。これは女性と違い、男性が家庭を持つことによって、また親になることによって彼自身の基本的なライフ・サイクルにはほとんど変化が生じないことによっている。つまり、結婚することによって、男性は自分の身の回りのことをはじめ、子どものことや暮らしのことは、「女性におまかせ」することが社会的にも容認されていることにある。このように男性が女性と違って父親になることを強いられないために、父親を男性モデルとしない子どもたちが持つような人間的に未成熟な父親イメージを与えられるような父親の存在が許されることにもなるのではないだろうか。本報告では、父親を男性モデルとして肯定するものと否定するものを比較対照することで父親の在り方について検討を試みた結果、日常的な父子関係の心理的・物理的在り方がモデルの取り込みに大きく関与していることが明らかとなる。それはかつて父親が持っていた強い父親像ではなく、むしろ子どもと情緒的にポジティブな関係にある父親像である。

男性においても学校・職種・職場だけでその価値が評価されるのではなく、つまり道具的役割としての経済的活動のみが男性の選別基準とされるのではなく、もっと人間としてトータルに考えるならば、当然父性とか父親役割というものが、男性の人生の中に問われるはずである。これは単に父親としての男性だけの問題ではなく、父親の生き方が子どもを介して世代的に拡大再生産される可能性を考慮すれば、家族構成員相互の役割が流動的・可変性をもつことの意味には非常に大きいものがある。このような視点に立った実証的な研究がもっとなされる必要があろう。さらに、ラムの指摘を待つまでもなく、子どもの認知する父親像には、日常の父親の行動、性格、価値観、過去体験、社会の中で占めている地位、妻との人間関係などさまざまな要因が関与しているわけであり、そのような視点を加味するとともに家族と言う集団の中で生活している各メンバーをエコロジカルな観点からとらえる試みも必要となろう。

調査に御協力いただいた小学生と中学生の皆さんそして調査の機会を与えていただきました

校長先生とクラス担任の諸先生に心から感謝申し上げます。

なお、資料の分析には JEPS を使用した。

#### 引用文献

- 1) 斎藤浩子 父親の役割 原野広太郎他編 「児童心理学の進歩 1984 年版」 104-135, 金子書房 1985
- 2) 玉井収介他 いわゆる学校恐怖症に関する研究 精神衛生研究 13, 41-85, 1964
- 3) 山田太一他 「おやじのおやじ論」 主婦と生活社 1985
- 4) M.E.ラム編 久米 稔他訳 「父親の役割」 家政教育社 1981
- 5) T.パーソンズ & R.F.ベールズ 橋爪貞雄他訳 「家族」 黎明書房 1981
- 6) 総務庁青少年対策本部編 「日本の父親と子供」 大蔵省印刷局 1987
- 7) 磯貝芳郎他 子どものライフ・スタイル研究(2) 東京学芸大学紀要 1 部門 30 集 75-80, 1979
- 8) Bandura, A., & Walters, R.H. Social learning and personality development. New York: Holt, Rinehart & Winston, 1963
- 9) 前掲書 5
- 10) 前掲書 4
- 11) Sears, R. Comparison of interviews with questionnaires for measuring mothers' attitudes toward sex and aggression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 2, 37-44, 1965
- 12) Mussen, P.H., Young, H.B., Gaddini, P. & Morante, L. The influence of father-son relationships on adolescent personality and attitudes. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 4, 3-16, 1963
- 13) 前掲書 4
- 14) 前掲書 6
- 15) 前掲書 6
- 16) はしだのりひこ 「お父さんゴハンまだ」 教育史料出版会 1986
- 17) 前掲書 5
- 18) 前掲書 4
- 19) 春日キスヨ 「父子家庭を生きる」 頸草書房 1989

## Children's Opinion Towards Their Fathers

Midori OTAKI and Takako MIYAKE

### ABSTRACT

Subjects, 261 elementary and junior high school students, were divided into 2 groups : those who have a positive opinion towards their fathers and those who have a negative opinion towards their fathers. Then the differences between the two groups' images of their fathers, time spent with their fathers and in what activities they spent time together were studied.

The results are as follows :

1. There is no significant difference based on sexual difference in the ratio of those who have positive opinion towards their fathers. A higher ratio of elementary school students than junior high students have a positive opinion towards their fathers.
2. The survey asked about 6 factors regarding the fathers' image. The positive group members scored significantly higher than the negative group members in all the factors except the 3rd, which is the only factor representing negative image towards the father.
3. The positive group members spend a significantly more time with their fathers than the negative group members both on weekdays as well as weekends.
4. The positive group member share the following activities with their fathers significantly more than the negative group member : breakfast, dinner, conversation and studying at home.
5. Many members in the positive group perceive vague parental role differences at home, while the negative group members have a clearer perception.